『長崎国際大学論叢』 第16巻 2016年３月 71頁～78頁

報　告

平成27年度学長裁量経費採択事業「留学生に対する博物館学の啓発と博物館学教育の質的向上の実践」の成果報告と今後の課題

下　湯　直　樹*，落　合　知　子，川　上　直　彦
俵　　寛　司
（長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科、*連絡対応著者）

The Accomplishment Report and Future Challenges for "Enlightenment of Museology for the International Exchange Students and the Practice for the Qualitative Progress of the Museological Education," the President Discretionary Expenses Project for the Fiscal Year 2015

Naoki SHIMOYU*, Tomoko OCHIAI, Naohiko KAWAKAMI
and Kanji TAWARA
(Dept. of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University, *Coordinating Lead Author)

Abstract

The project of "Enlightenment of Museology for the International Exchange Students and the Practice for the Qualitative Progress of the Museological Education" applied by members of the curator course committee (Head: Tomoko OCHIAI, Naohiko KAWAKAMI, Kanji TAWARA and Naoki SHIMOYU) was adopted by the President Discretionary Expenses Project for the Fiscal Year 2015. The actual contents and aims of this project are ① to provide the tools necessary for the practical training and to make the tools useful for the public relations, ② to hold the specially organized practical training and lectures, ③ to build up the exchange and cooperative system with the Chinese universities and ④ to renew curriculums. These have been practiced for enlightenment of museology for the international exchange students and the practice for the qualitative progress of the museological education and here we sum up and report the accomplished results and future challenges of this project.

Key words

Chinese, International students, Museology, Development of educational environment

要　旨

国際観光学科博物館学芸員課程委員会委員（落合知子・俵寛司・川上直彦・下湯直樹）が平成27年度学長裁量経費に申請した「留学生に対する博物館学の啓発と博物館学教育の質的向上の実践」が採択された。本稿は留学生に対する博物館学の啓発と博物館学教育の質的向上の実践に向けた事業内容（①実習機材の充実や広報媒体の製作、②博物館学特別実習・講義の開催、③中国の大学との交流と協力体制づくり、④カリキュラムの変更）に関する実践報告及び成果報告、今後の課題について纏めたものである。

キーワード

中国、留学生、博物館学、教育環境の整備

1．事業内容と目的

今年度から博物館学芸員課程委員に落合知子教授、俵寛司准教授、川上直彦講師、下湯直樹助教が新たに着任したことから、文部科学省が推奨する課程の在り方への転換と、平成27年度学長裁量経費採択事業「留学生に対する博物館学の啓発と博物館学教育の質的向上の実践」（以下、本事業）に際し実施した取り組みと、その成果を合わせて報告する。

まず、本事業に申請する前提として、昨今の中国に於ける博物館建設が顕著な社会現象の一つであり、ブームであった。統計的にみても1980年の中国全土の博物館数が365館であったのに対し、1990年に1,012館[1)]、2014年には4,165館[2)]と21世紀以後の増加率は凄まじいものがある。これら新設される博物館の多くは、行政主導の博物館ではなく民営博物館（我が国の私立博物館に相当する館）であることを特徴とする。このような現状に伴い、中国国内の大学及び大学院では博物館学コース等が開講されるなど博物館学が盛んになるとともに、我が国へ留学し、博物館学の修得を目指す学生も少なくない。留学生が日本の学芸員資格を取得し、さらに大学院で博物館学を追究する目的は、学芸員になることは勿論のこと、母国の大学で博物館学を講じる教員を目指すことも視野に入れたものとなっている。

かかる観点より、長崎国際大学がグローバルな大学であるべく、博物館学芸員課程としても留学生に開かれた資格課程へと変革することは自然の流れである。本事業の第一の目的は留学生に対する博物館学の啓発を基本とし、将来的に学芸員資格および博物館学の修得を目的に入学する留学生の誘引を目指すものである。第二に文部省が推奨する課程の在り方となるべく、教育的な質を向上するための教育環境の整備と内容の充実を目指すものである。

先の二つの主目的をもとに取り組む主な事業は以下の４項目であった。

① 本学学生（留学生含む）に対する学芸員資格課程履修者の増加を目指して、夏季休暇前後に博物館学ガイダンス・特別講義・特別実習等を実施する。また、オープンキャンパス時には新入生を対象とした博物館学ガイダンスを行う。

② 博物館学への誘いと啓蒙を目的とする小冊子の作成を行う。

③ 講義および実習機材の充実を図る。

④ 高度博物館学教育の推進者を招聘して講演会を開催する。

本事業にあたる役割分担としては全体統括を落合知子教授が、小冊子作成統括を俵寛司准教授と川上直彦講師が、実習機材の手配、各種説明会・実習準備を下湯直樹助教が担った。以下、行った取り組みを時系列で述べていく。

2．実施した事業と成果

① 実習機材の充実

我が国の博物館の約８割が人文科学系博物館であることから、学芸員として歴史・美術資料の取り扱い方法の修得は基本的な要件である。さらに博物館とは「モノ」で教育する社会教育施設であり、博物館実習も「モノ」がなければ実習をすることは不可能であり、通常の講義形態の授業と変わりないと考える。博物館実習とは博物館学芸員課程の最終仕上げでかつ、最も重要である実習教育を推進するための資料購入は教育上不可欠なものとして、実習の充実を図ったものである。

2015年度に学長裁量経費、博物館学芸員課程実習費で整備した主な実習機材は表１の通りである。博物館学芸員課程における実務実習人数と機材の数は、文部科学省の推奨する『博物館実習ガイドライン』に合わせ、１クラスにつき15名以下にあわせ、実習機材も最低限必要な数として15を基準として購入した。予算上、模造刀を必要数の15振りを揃えることは出来なかったものの、掛軸や刀剣とは本学の教育理念である「ホスピタリティ」精神の育成を実践する茶道文化とは深い関わりのある歴史資料である。

実習内容	科　　目	数　　量
〈刀剣の取扱い〉	模造刀	12振り
	刀剣手入れセット	15セット
	刀袋	15袋
	刀掛け	2台
	刀収納箱	1箱
〈掛軸・巻子本・箱物の取扱い〉	掛軸、巻子本	17巻
	箱物	12箱
〈記録と画像処理〉	デジタルカメラ D7200 18-140 VR レンズキット	1台
	イラストレータ	1ライセンス

表1　2015年度 購入資料一覧と対応する実習内容

例えば「博物館実習」で掛軸の歴史的背景や取扱い方および展示方法を学ぶことで、本学茶室の床の間に懸けられている掛軸のもつ意義を初めて理解できるようになる。さらに、刀剣の手入れ方法を学ぶことも、本学の武家茶の精神とも通じ、武士の立ち振る舞いを総合的に理解することになる。このように博物館資料を通して「茶道文化」と「博物館実習」は相互補完する科目となりえることが予測できるのである。

また、高度情報化社会に対応すべく博物館の学芸員には撮影技術はもとより、デジタル画像やデザイン処理技術が基本的なスキルとして求められているのが現状である。そのため、デジタルカメラの購入及び画像処理ソフトのライセンスの購入は必須項目であった。

②　博物館学芸員課程リーフレット『ミュージアムへの航海』の発行

これまで本学の博物館学芸員課程には具体的な課程内容を紹介するリーフレットがなく、本

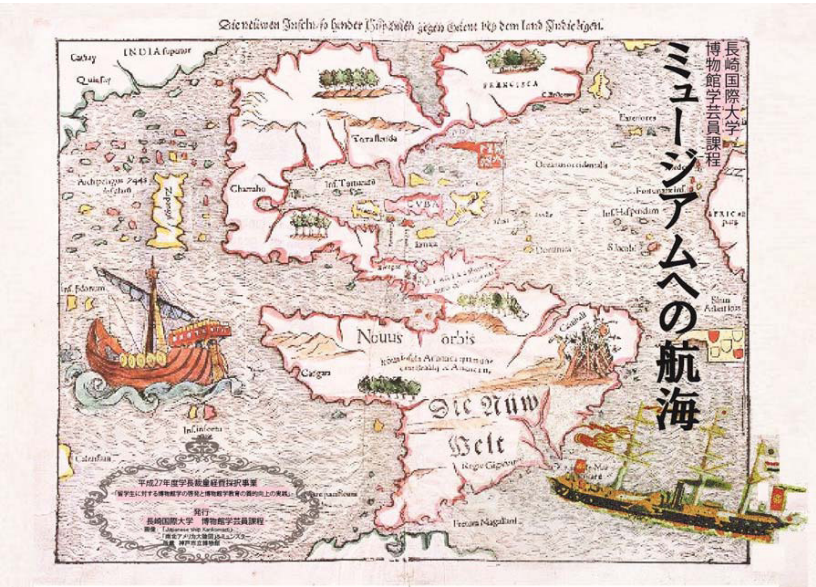

図1　博物館学芸員課程リーフレット『ミュージアムへの航海』

事業の目的である博物館学の啓発には欠かせない広報物であることから当リーフレット（図１）を作製したものである。リーフレットの仕様は、両面４色の８頁、初回の発行部数は800部とした。リーフレットの構成は教員紹介、学芸員の仕事、学芸員になるためには、学芸員資格の取得方法、博物館学芸員課程履修モデル、授業風景や実習風景の記録写真、在学生からのメッセージ、大学院の紹介、学芸員として活躍する卒業生の項目から構成され、ビジュアルを通して課程の具体的な内容を理解できるものとなっている。その配付先は主に学芸員資格取得を希望する学生が多数受講する「生涯学習概論」や「博物館情報・メディア論」などの授業時に加え、2015年７月19日に開催された第１回オープンキャンパス、７月20日に開催した勾玉製作ワークショップ、８月23日に開催された第２回オープンキャンパス、９月24日に開かれた秋季入学式での配付であった。その結果、入学希望者やその保護者、留学生に向けたリーフレットとして活用することができ、博物館学の啓発には大変有意義なものとなった。2016年３月には、内容を一部リニューアルし、中国語に翻訳したリーフレットも発行した。

③　博物館学特別実習―勾玉製作ワークショップ―

博物館学への誘いとして７月20日に勾玉製作のワークショップを開催した。勾玉製作ワークショップは、我が国の博物館で数多く実施されている教育普及活動の一つであるため、自身が学芸員となり指導することを踏まえ、参加学生は思い思いの勾玉を製作した。留学生１名、日本人学生23名の参加があり、学生が博物館学に対する興味を持つきっかけとなった。

図２　勾玉製作ワークショップの参加学生

図３　勾玉製作ワークショップのチラシ

④　中国に於いての博物館学の講演と展示指導

本事業の一環として、落合教授が９月２日に陝西省西安大華博物館で西安文物局処長、民間の博物館館長及び関係者、大学教員、西北大学をはじめとする西安市内の学生に対して「野外博物館」についての講演を行った。落合教授がこれまで日本の博物館学を紹介することを目的として、中国において講演を行ってきたことから実現に至ったものであり、先述した中国に於ける博物館建設ラッシュにかかる博物館学熱による招聘と言えるものである。講演会場となった西安大華博物館は近代化遺産である紡績工場を保存し、展示施設として開館した新しい博物館で、西安ではこのような近代化遺産の博物館

図４　博物館学の講演（西安市）

図５　西安大華博物館

化は初めての試みのものである。講演の内容も長崎の近代化遺産や中国の遺跡博物館、民俗野外博物館など、中国ではまだ確立されていない分野であることからも、聴講者は興味深く聞いていた。中国語での90分の講演には200名ほどの参加者があり、質疑応答も盛んに交わされ、日本の博物館学への関心がより深まったものと思われる。

また、９月４日には、上海大学博物館（2017年開館予定）の展示についての指導を行い、資料の収集方法、展示技法、展示ケース、照明、動線、教育活動、学芸員について長時間に亘り討論が交わされた。これは落合教授が、中国の博物館学が発展途上であるなかで、上海大学が日本の博物館学を範として最新の大学博物館の建設に取り組んでいることから展示指導を請われたことによるものであった。

⑤　博物館学特別講義―高度博物館学教育推進者の招聘と講演―

先の中国での講演や展示指導に関連し、西安市民営博物館や上海大学との協力体制の構築、我が国の先進的な博物館学教育の教授を目的に、10月20日に、上海大学中國藝術産業研究院羅宏才教授、西安于右任故居紀念館于大方館長、國學院大学青木豊教授を招聘した。羅教授は、美術考古学を専門とし、30年以上に及ぶ考古学に関する調査、発掘、保護、展示の研究経験を有し、大学院生の指導はもとより中国民営博物館の研究を推進、陝西省の科学技術進歩賞、陝西省建国40週年十大考古発見賞、中国第二回舞台美術展覧会優秀創作賞等を受賞するなど広い分野で活躍する学者である。一方、青木教授は文部科学省「組織的な大学院教育改革推進プログラム」に採択された國學院大學大学院「高度博物館学教育プログラム」の取組代表者であり、我が国における高度博物館学教育実践の第一人者である。

講演は、本学の4101教室に於いて、第１部（16:20～17:20）が羅教授による「中国民間博物館の歴史、現状と動向」（于館長の通訳）、第２部（17:30～18:30）が青木教授による「日本の博物館の現状と学芸員―学芸員になるには―」の２本立てであった。

この講演には本学教職員及び留学生、博物館学芸員課程を履修する学生200名余りの参加があり、盛況で終了した。また、講演前には学長及び学内関係者と羅教授、青木教授、于館長が、これまでの長崎と上海との歴史的な日中の文化交流を踏まえ、上海大学と長崎国際大学のこれからの連携協力に向けての協議を行った。上記の講演会の開催により、学生は学芸員を目指す志がより高まったものと推察される。さらに、学内関係者との協議により、西安市民営博物館や上海大学との協力体制が進展し、招聘の目的を十分に果たしたといえる。

⑥　博物館学芸員課程カリキュラムの変更

本来であれば、以下の学科のカリキュラム改革や博物館学専攻の大学院生の誘引、出口の問題は個別に成果報告をあげるべき事項であるが、本事業の取り組みと密接な関係にあるため合わせて報告することとする。

これまで本学の博物館学芸員課程は、講義形態の授業を基礎とし、その実践の科目として「博物館実習」を４年次に行ってきた。「博物館実習」は主に見学実習と学内実習、館園実習の３つの実習形態に分かれており、今年度の見学実習は北九州域の博物館見学を２泊３日で行い、学内実習は博物館実習室で通年科目として資料の取扱い及び紙資料の修復を学習し、館園実習は夏季休暇期間のうち10日間程を実際に博物館で就業体験するものであった。

しかし、４年次は就職活動の時期と重なり、履修する前段階で学芸員資格の取得を諦める学生も出たことから、実習の在り方を見直し、より学習効果の高いカリキュラムを編成することとした。その大きな見直しの一つが、表２の通り、これまでの３つの実習形態を各科目として博物館実習Ａ・Ｂ・Ｃとしたことである。その目的は、①「博物館実習Ａ」：（基礎）早い年次で多種多様な博物館を見学し、その在り方を幅広く学び興味を持つこと、②「博物館実習Ｂ」：（応用）就職活動時期を避け、４年次の館園実習に向けた実践的な学習を行うこと、③「博物館実

図６　特別講義　羅教授と于館長

図７　特別講義　青木豊教授

表２　現行と2016年度以降の博物館学芸員課程カリキュラムの対応一覧

現　行	学年	単位	改　正　案	学年・前後期	単位
博物館概論	１・半	2	博物館概論	１・半・後期	2
生涯学習概論	２・半	2	生涯学習概論	２・半・前期	2
博物館資料保存論	２・半	2	博物館資料保存論	３・半・前期	2
博物館情報・メディア論	２・半	2	博物館情報・メディア論	２・半・後期	2
博物館教育論	２・半	2	博物館教育論	２・半・前期	2
博物館展示論	３・半	2	博物館展示論	３・半・前期	2
博物館資料論	３・半	2	博物館資料論	２・半・後期	2
博物館経営論	３・半	2	博物館経営論	３・半・後期	2
博物館実習（見学実習）	４・通	3	博物館実習Ａ（見学実習）	２・集中	1
（学内実習）			博物館実習Ｂ（学内実習）	３・通	1
（館園実習）			博物館実習Ｃ（事前事後指導・館園実習）	４・集中	1

習Ｃ」：（展開）実際の現場である館園実習を行うとともに、事前学習、事後の振り返りまで含めた総合的な仕上げとすること、として重層的な教育実践を目標とした。

また、本学は大学附属博物館を有していないことから、「博物館実習Ｃ」（館園実習）は学外に行くことが義務付けられている。現状、「博物館実習Ｃ」は学生自らが実習先を探さなければならず、就職活動と重なるなど学生の負担が大きく、学習内容も各館の方針によって様々であり、一定した実習内容ではないのが現状である。さらに今後は学芸員資格取得希望者が増加することが予想され、博物館側の受け入れ人数に限界をきたすことが懸念される。このようなことから、これらの改善策として、近隣のハウステンボス美術館と協力体制を構築することで、多人数が受け入れ可能なハウステンボス美術館での実習を中心に行い、学生の負担の軽減、実習内容の質的向上を図ることとした。当協力体制の構築によって、国際観光学科に在籍する資格取得希望学生にとっては、多くの観光客で賑わうハウステンボス美術館との整合性が高く、大学との距離も近いことから、学業に影響を及ぼすことなく博物館業務を学ぶことが可能となった。

⑦　博物館学専攻の大学院生

９月11日の大学院秋季入学試験において博物館学を研究対象とする大学院入学希望者が１名受験し、合格した。この博物館学を研究対象とする学生の大学院への進学は、秋季の大学院入試における唯一の大学院進学者であることからも、本事業最大の実績と言える。また、次年度からはこれまでの大学院科目に博物館特講と事例研究（博物館）が加わり、博物館学を専門とする大学院講座が誕生したことになる。今後は、学芸員への就職の際に修士以上が採用条件となることが大半であるため、本学でも大学院進学者を増加させ、有資格を輩出するだけでなく、より多くの学芸員への就職に繋げていく必要がある。またそのためには、高度な博物館学教育が必要となるため、より多くの博物館学関連講座を開講しておく必要があると思われる。

⑧　美術館への就職

本学の博物館学芸員課程に在籍する学生１名が、ハウステンボス美術館に非常勤職員として採用された。上記の通り、修士以上が採用条件となるなかで、非常勤でありながらも採用されたことの意義は非常に大きい。今後、実績を積むことで将来的に正規学芸員の採用に直結していくことと思われる。

３．今後の課題

今回、当事業が平成27年度学長裁量経費に採択されたことで、博物館学芸員課程における教育環境の整備が大きく進み、留学生の資格取得を促す施策を行うことができた。しかし、在籍する留学生は本来の留学の目的と異なるため、大幅な増加は見込めないのが実情である。今後はより時間をかけて取り組んでいくとともに、留学生が学習しやすい環境整備として博物館学を研究対象とする大学院生を育成し、将来的に留学生のフォローが可能なＴＡやＲＡの配置も視野に入れる必要がある。

周知のとおり中国は、文物、文化資源が豊富であり、博物館も物凄い勢いで建設されているのが現状である。それに伴い、博物館学を講じる大学も現れ、今後益々盛んになることが推測される。現代社会における日本の大学は、海外との連携が必須であり、留学生の受け入れは当然のこととなっている。しかし、博物館学に特化した留学生の受け入れは日本全国どこにも確立されておらず、長崎国際大学が先鞭を付けることで、特色ある博物館学の実践校となるはずである。中国においても長崎国際大学は博物館学を学ぶ大学として印象付けることとなることは間違いない。今後一層、国際色豊かな博物館学の構築を目指し、受講者の増加を図っていきたい。

註

1）中国通信社「中国の各種博物館2200に」2005.5 http://www.china-news.co.jp/node/627（2015年12月11日検索）

2）済龍 China Press「中国：全国博物館数4165軒に達する」http://www.chinapress.jp/12/41793/（2015年12月11日検索）